

【梗概】 漫画『こちら葛飾区亀有公園前派出所』 における下町描写に関する研究

ううせいじん

1. 研究の目的

秋本治の『こちら葛飾区亀有公園前派出所（以下「こち亀」）』は、東京の下町を舞台に描かれた漫画であり、「激戦区」とされる「週刊少年ジャンプ」誌上で30年に渡って連載されてきた。「こち亀」が未曾有の長期連載を達成した理由の1つは、「下町空間」すなわち秋本の描く世界が読者の幅広い共感を得てきたことにあると考えられる。その、読者の支持を受けてきた「下町空間」とはどのようなものであろうか。その様相を明らかにしたい。

本研究の第一の目的は、「こち亀」における下町描写の特徴を、描写に込められた秋本の意識とともに明らかにすることである。

また、30年に及ぶ連載の過程で「こち亀」に描かれる世界は変わり続けている。連載史を紐解き、秋本の下町に対する意識および「こち亀」における下町描写の変遷を追い、その過程を分析することが本研究の第二の目的である。

2. 研究の方法

2-1. 研究対象

「こち亀」単行本148巻（1977 - 2006）の1413話に描かれた下町空間^{*1}を分析対象とした。分析に当たっては、「ジャンプ」ならびに秋本の著作および発言の収録された文献を参考とした。

2-2. 下町描写の特徴分析

「こち亀」において表現される下町描写を実際のお話が展開する「シーン」と扉絵・挿絵からなる「カット」に分類して悉皆抽出し、リスト・アップした。このリストに基づき、秋本のメッセージが色濃く反映されているシーンを抽出し、類型化を試みた。以上を踏まえ下町描写の特徴を分析した。

2-3. 下町描写の変遷過程の分析

2-2で得られたリスト並びに文献に基づき、作品の「連載年表」を作成した。年表には30年間の「社会情勢」「作品の展開」「特徴的な下町描写」「作者の発言・意識」をプロットし、「こち亀」における下町表現および作者の意識の変遷を視覚化した。ここで得られた結果に基づき、「こち亀」における下町描写および秋本の意識の変遷過程を分析した。

3. 下町空間の特徴

3-1. 「こち亀」における下町描写

「こち亀」1413話のうち、シーンまたはカットのいずれかで下町が描写される話は、作品全体の64.5%に当たる911話に達することが分かった。

3-2. シーン描写の特徴

「こち亀」におけるシーン描写は全体の42.8%に当たる623話710シーンであった。これらをリスト・アップし、「A:日常風景」「B:祭り」「C:思い出・人情話」「D:ギャグ」「E:メッセージ」「F:下町案内」「G:時事」「H:その他」の8パターンに分類した。これらをタイプ別に見ると、図1の通りとなる。

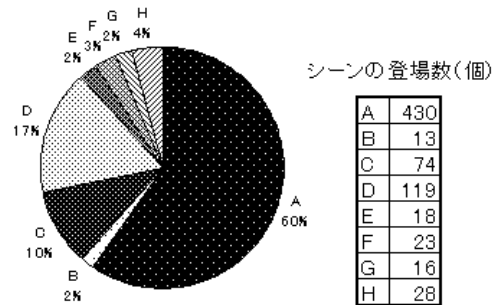


図1 「こち亀」の下町シーン描写（タイプ別）

これによると、「こち亀」において登場する下町描写（シーン）のうち、日常風景を描いたものが群を抜いて多く（430シーン・59.6%）、日常ベースの世界として下町空間が描写されていることが明らかとなった。これにギャグ（16.5%）、思い出・人情話（10.3%）が続いた。なお、作者のメッセージが反映されているものは全体の3.2%にみられた。

次に舞台となった場所を集計した結果を示す（図2）。作品の主舞台である亀有・葛飾区が全体の66%と際立ち、次いで主人公の出身地である浅草（13%）、および上野・神田（6%）の描写が目立つことが判明した。これらを合計すると、全体の85%を占める。これらはいずれも、秋本にとって思い入れの深い場所である^{*2}ことが分かった。

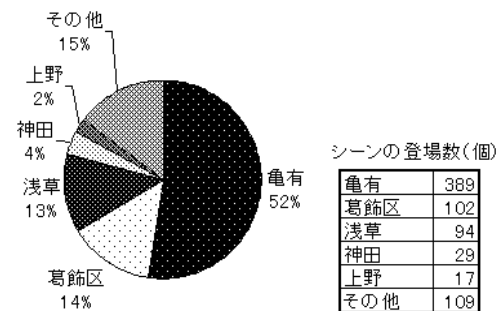


図2-2 「こち亀」の下町シーン描写（場所別）

※1つのシーンに複数の場所が登場する場合がある。

3-3. カット描写の特徴

「こち亀」におけるカット描写は延べ650話1067カットに登場していた。これらを、本編に付帯して描かれた「カットA」と、本編とは独立して描かれた「カットB」とに分類した。

結果、扉絵は316カット（タイプAが53、Bが263）、挿絵は751カット（タイプAが134、Bが617）であり、扉絵の83.2%、挿絵の82.2%が「タイプB」であることが判明した。

またこれは、秋本が「消え行く下町の風景を残すために」意識的にカット描写をしている^{*3}ことが理由であることも分かった。

3-4. メッセージの分析

3-2 で得られたシーン描写のリストを基に、作者のメッセージが色濃く反映されているシーン（重要シーン）を抽出した。結果を図3に示す。

年	シーン	対となるキャラクター	メッセージ
53-7	浅草の変化に驚く	父	「いくらビルが建ち街が変わろうと下町の人情は変わりゃしないさ」と諭す
70-9	浅草の同級生が外国人と結婚したことに驚く	同級生	「世の中時代とともに変わるんだよ」と諭す
99-8	佃島の祖父が長屋を立ち退いたことに激怒する	祖父	大切なのは住んでいる人の気持ちであり、「ビルが建とうがマンションが出来ようが町内のつながりには全然関係ない」と諭す
125-8	寿司修行を希望する外国人女性に否定的見解を示す	女将	「大切なのは技量だよ」と両津の見解を一蹴する
126-4	神田明神がコンクリート製であることをあげつらう	女将	「肝心なのは中身だよ」と諭す

「変わり行く下町世界をマイナスの視点で見る（外見の変化を拒む）」	「変わり行く下町世界をプラスの視点で見る（外見の変化を受け入れ、肝心なのは中身[住まう人の気持ちや人情が変わらないこと]とする）」
----------------------------------	---

図3 重要シーンの抽出結果

これらは「主人公（両津）は変わり行く下町を嘆くが、それと対になるキャラクターが大切なのは中身であり、外見的变化は受け容れなくてはならない」というパターンに集約された。またここで示された「変化を受け容れる」下町は、秋本の理想とする下町像⁴⁾であることも判明した。

4. 下町描写の変遷

4-1. 連載年表

30年の連載の中で、下町描写および秋本の下町に対する意識がどのように変化したのか探るため、「連載年表」を作成した。これにより明らかとなった秋本の意識ならびに下町描写の変遷を、図4に示す。

連載最初期の1976年～77年にかけては作品の設定が固まっておらず、模索状態が続いた。1978年になると下町世界にアクション物の要素が加わり、現在に通じる破天荒な世界観が確立した（転換点①）。翌79年に作者が読者の反響を受け、意識して下町世界を描くようになると、作品の設定そのものも固まり、下町描写も定着した（転換点②）。1984年になると、作中に単なる下町描写だけでなく、変わり行く東京を不安視する秋本の意識が込められるようになり（転換点③）、1987年には作中に「変化を許容する」という秋本の核となるメッセージが投影されるようになった。なお、この頃から下町のシーン描写が急増している（転換点④）。1992年に「消え行く風景を残したい」という秋本の意識の下にカット描写がなされるようになると、以降、下町描写は安定をみた（転換点⑤）。現在も下町描写の安定的な推移が続くが、1999年には「今まで試していなかったこと」を描くという秋本の意識⁵⁾の下、第二本拠・神田の寿司一家が登場し、「こち亀」世界に広がりが見られた（転換点⑥）。

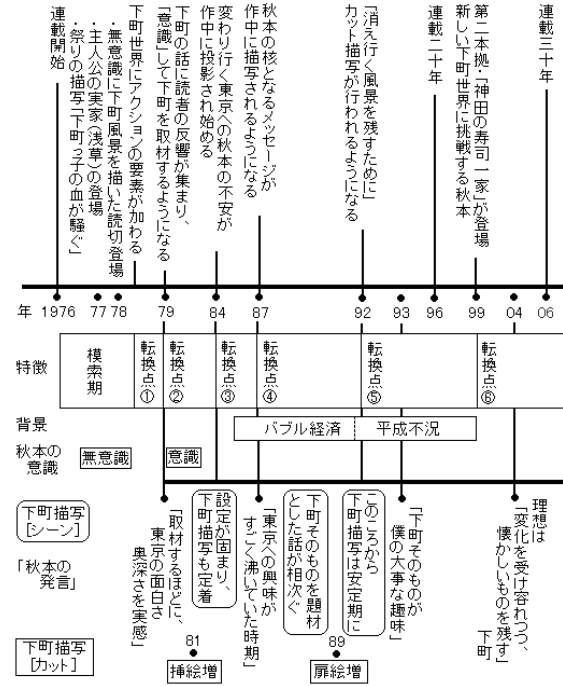


図4 秋本の意識、下町描写の経年変化

4-2. 秋本の意識

秋本自身は当初、下町を描くことに興味がなく、読者の反響を受けて下町を描くようになったと自覚⁶⁾する。しかし実際は、1979年に自覚をする以前から下町空間を無意識的に好んで描写していたことが分かった。

4-3. 時代背景

バブル期を境に下町描写が急増したが、それは変わり行く東京を目の当たりにした秋本の「今この光景を残さなくては」と考える意識によるものであった。

5. 秋本治の表現と世界観

文献⁷⁾を基に、秋本の表現方法と世界観を分析した。結果、秋本は劇画に影響されたリアルな視点で下町空間を描いていることが分かったとともに、「変化を受け容れる」という理想の下町像は他作品においても一貫していることが分かった。また、秋本の描く下町世界は原体験に基づく空間であることも判明した。

まとめ

「こち亀」における下町描写と秋本の意識の特徴把握およびその変遷の分析を行った。結果、シーンには秋本の理想とする変化に寛容な下町像が投影され、カットには下町の風景を残すという秋本の意識が見られることが分かった。変遷についてみると、秋本は1979年を境に下町の描き手を自覚し、年々描写を深化させていくが、実際は当初から下町空間を無意識的に好んで描写していたことが判明した。

注釈

- *1) 秋本治 (2004) 『両さんと歩く下町』 集英社、p.12 の定義。
- *2) 秋本 (2004) pp.11-50,66-94,123-162,184。
- *3) 秋本 (2004) pp.245-246、『カメダス』(1993) 集英社 pp.581。
- *4) 秋本 (2004) pp.218-222。
- *5) 『このマンガがすごい! 2006・オトコ版』(2005) 宝島社 p.120。
- *6) 集英社「週刊少年ジャンプ」1996年 50号
- *7) 「ジャンプ」、秋本治 (1991) 『東京深川三代目』 集英社ほか。